

今後の市立幼稚園の方向性 ＜育ちの保障につながる1学級あたりの園児数＞

資料2

■第1回協議会要旨(委員からの意見)

・定員数について、集団生活はある程度の規模がある方がよい。ここも検討すべき。

■1学級あたりの適正人数とは

○平成23年度文部科学省委託「幼児教育集団の形成の過程と協同性の育ちに関する研究」より(平成24年3月社団法人全国幼児教育研究協会)

・実地調査及び意識調査からの考察

一人一人の幼児に十分な目を届かせたいと考える「個に応じた援助」と、幼児の自主性を重んじ、協同性の芽生えを培うための「協同性の育ちへの援助」へ調和がとれるように、学級にある程度の人数が必要であると考えられる。

一人一人の幼児への個別の対応が求められる「個に応じた援助」を行い、集団の形成過程を大切に、「協同性の育ち」を培うためには、1学級に3歳児でも20人前後、4・5歳児は21人以上30人くらいの集団が適切であると考えられる。

○市立幼稚園の1学級あたりの定員

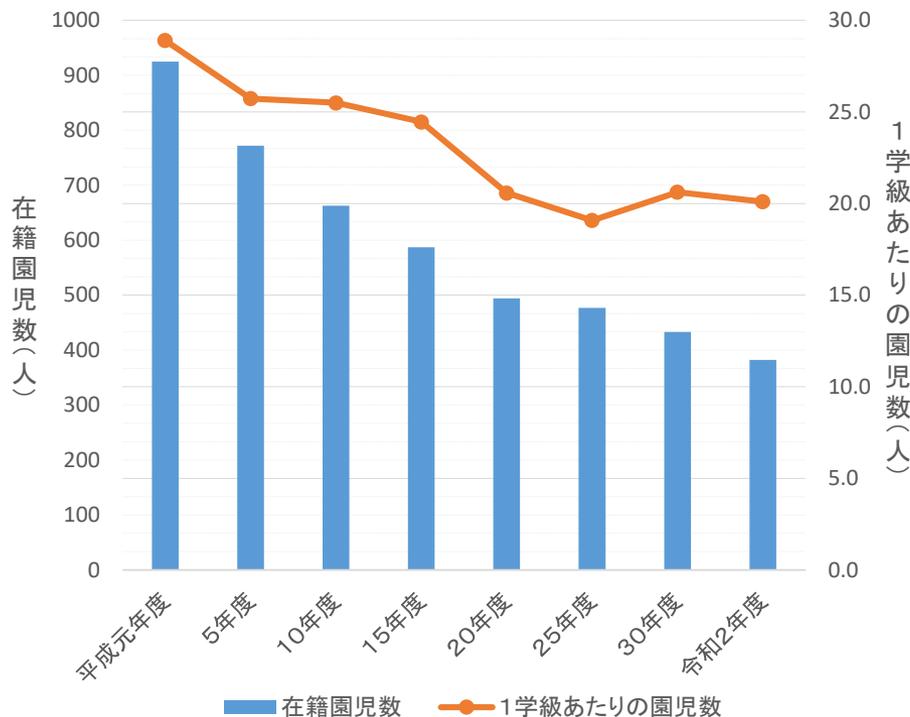
市立幼稚園の1学級あたりの定員は30人。31人となると、15人・16人で分かれて2学級編成となる。

今後の市立幼稚園の方向性

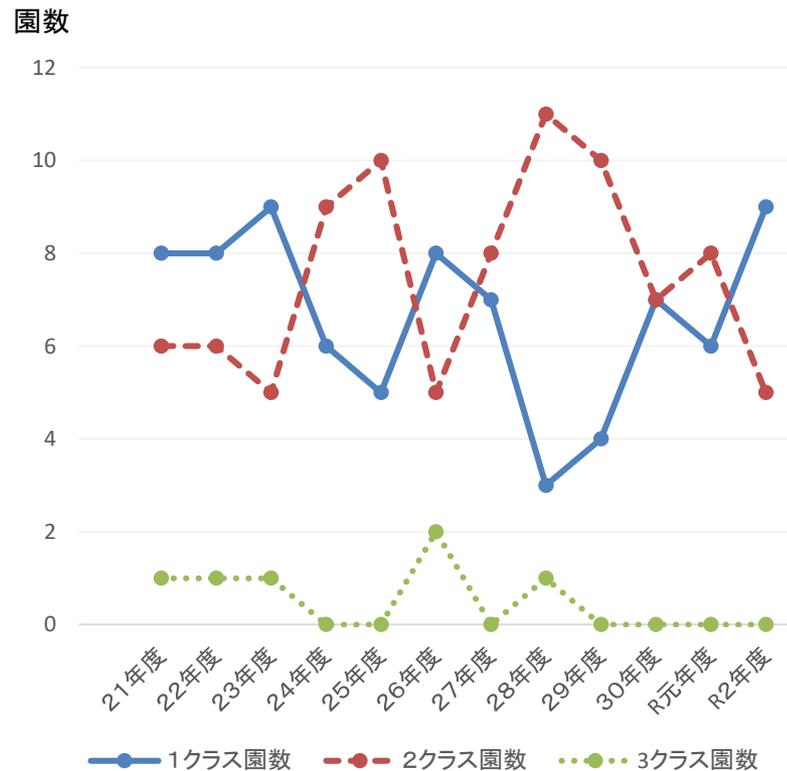
< 市立幼稚園園児数の現状 >

資料2

■市立幼稚園における在籍園児数と1学級あたりの園児数の推移



■市立幼稚園における学級数の推移



○平成元年に900人を超えていた園児数であるが、令和2年には半数ほどの400人程となっている。
 1学級あたりの園児数の平均は、**平成元年度は1学級あたり28.9人**(合計32学級)だったの
 に対し、**令和2年度は1学級あたり20.1人**(合計19学級)となっている。**園児集団が縮小**して
 いることがわかる。

○学級数は、園児数の減少とともに3学級編成の園数は減少し、**1学級編成の園が増加**している。

今後の市立幼稚園の方向性

<市立幼稚園各園における園児集団の状況>

資料2

	幼稚園名	定員	園児数 学級数	H	H	H	H	H	H	H	H	H	R	R
				22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2
1	境川幼稚園	60	園児数	43	47	49	44	68	41	46	48	29	42	45
			学級数	2	2	2	2	3	2	2	2	1	2	2
2	南立石幼稚園	60	園児数	19	35	31	27	33	40	31	36	9	34	22
			学級数	1	2	2	1	2	2	2	2	1	2	1
3	亀川幼稚園	60	園児数	43	23	41	37	42	44	48	43	46	39	31
			学級数	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2
4	朝日幼稚園	60	園児数	31	56	45	52	47	39	46	41	44	51	26
			学級数	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
5	石垣幼稚園	90	園児数	63	61	56	44	61	49	51	49	54	39	35
			学級数	3	3	2	2	3	2	2	2	2	2	2
6	上人幼稚園	60	園児数	33	29	33	27	29	28	31	33	32	30	25
			学級数	2	1	2	1	1	1	2	2	2	1	1
7	鶴見幼稚園	60	園児数	56	53	51	33	52	43	51	41	55	46	53
			学級数	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
8	春木川幼稚園	60	園児数	26	28	20	23	28	30	39	34	20	26	18
			学級数	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1
9	緑丘幼稚園	60	園児数	24	16	41	25	23	30	31	31	35	39	28
			学級数	1	1	2	2	1	1	2	2	2	2	1
10	大平山幼稚園	60	園児数	39	48	37	43	32	37	34	26	27	29	25
			学級数	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1
11	南幼稚園	60	園児数	28	23	15	41	20	17	29	23	19	13	15
			学級数	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
12	べっぶ幼稚園	30	園児数	27	24	22	32	24	21	17	23	21	21	14
			学級数	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
13	山の手幼稚園	60	園児数	42	47	30	42	34	43	50	44	40	40	41
			学級数	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2
14	東山幼稚園	15	園児数	6	10	7	7	7	8	3	12	10	11	4
			学級数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計 (R3以降は予想)		795	園児数	480	500	478	477	500	470	507	484	441	460	382
学級数	23		22	23	24	24	22	25	24	21	22	19		

○ 文部科学省委託研究の結果より、**1学級あたりの園児数が20人～30人が適正数と仮定すると、園児数の減少により1学級の適正数を下回る園、そのような年度が継続している園がある。**

○ 令和2年度における最大園児数は53人(1学級あたり26人程度)、最小園児数は14人(1学級園)となっている。

○ 今後も少子化・幼児教育無償化の影響により、全体の園児数の減少とともに、**園児集団の縮小が予想される。**

※市立幼稚園の1学級あたりの定員は30人。31人となると、15人・16人で分かれて2学級編成となる。

<単学級園>

1園あたり

30人以下

20人以下

<複数学級園>

1学級あたり

20人以下

	R3 (2021)	R4 (2022)	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	R8 (2026)	R9 (2027)	R10 (2028)
387	375	363	353	341	331	325	319	

市内5歳児数 (R3以降は予想)	923	957	923	930	931	895	935	880	861	862	810	823	798	773	750	725	705	692	678
------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

※R3年度以降の予想園児数は、市内5歳児数の47% (R2の就園率) を乗じた数

＜市立幼稚園の課題(資料2のまとめ)＞

○園児数減少による、**育ちの保障につながる園児集団維持の困難さ**

- ・単学級園の増加
- ・市内に14園が点在し、20人～30人程度(文部科学省委託研究)の園児集団が維持困難な園の増加や、そのような年度が継続する園がある。

＜協議の視点 1＞

- 1学級あたりの適正園児数をどう考えるか、また、1園あたりの学級数はどうか。園児数や学級数により子どもの育ち(個や集団での育ち)にどのような影響があると考えられるか。

＜協議の視点 2＞

- 子どもの育ち(個や集団での育ち)を保障できる園児集団を維持できる、市立幼稚園の適正配置をどう考えるか。